

ついで見ることができると。

以上のように、聖人が用いられた譬喩や説話には、譬喩や説話の持つ意味をこえた宗教的な深い意味がうかがえるのである。

〔註〕

- (1) 『大日本仏教全書』第一四七巻所収の『宝物集』による。
- (2) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一七五九—一七六五頁
- (3) 右同書 一七六五頁
- (4) 全三三紙の内、五紙を費やされている。

## 日蓮聖人自筆書状の 料紙使用法について

寺 尾 英 智

日蓮聖人の書状は、一紙のものから二十紙以上にわたるものまで、長短様々なものが残されている。これらの大部分は檀越に宛られたものであり、聖人の布教活動における書状のもつ重要性は、既に指摘されている通りで

ある。

ところで、聖人の書状がどの様に認められ、どの様な形をもっていたか、その形態的面については、従来あまり明らかにはされてはいない。しかし、遺文の文献学的研究を進める場合、その基礎的作業として真蹟遺文が本来どの様な形態であったかは明らかにされる必要があると考えられる。そこで本発表においては、古文書学的視点から真蹟書状の形態について、特に料紙の折り方、封等について二・三の事例の検討を行ないたい。

まず、比較的事例の多い二紙の書状についてみると、『日蓮聖人真蹟集成』等により十四通をあげることが出来る。このうち切封墨引・上書の確認されるもの四通、上書の確認されるもの一通があり、位置はいずれも第二紙奥である。

ところで、一般に二紙の書状の場合には、本文の記されていない面を背中合わせにして、一紙奥から折りたたまれて封・上書が加えられ、これを開くと封・上書は二紙奥に位置することが知られている。聖人の書状の場合にも同位置に封・上書が検出されるのであるが、更に「観心本尊抄副状」修理の過程で折目跡が発見され、上述の場合と同一に折りたたまれていたことが明らかにな

った。

次に四紙の書状についてみると、先と同様に四通をあげることが出来る。このうち一通に墨引、二通に墨引・上書の断片が貼合されたりしているが、いずれも本来は第一紙端裏であったと考えられる。ところで、「問注得意鈔」の第四紙は、字面を中にして折りたたまれ、この時には一番内側であったことが判明した。以上から四紙の書状は、第一紙を一番外側に、第四紙を一番内側にし、いずれも字面が中になるように重ねられて折りたたまれ、墨引・上書が加えられたことが明らかとなる。

また、五紙或はそれ以上に及ぶ書状において本紙に封が加えられているものを検討すると、四紙と同様に第一紙端裏に墨引或は墨引・上書を見出すことが出来た。事例は少いが、これらの書状も四紙の書状と同様に封が加えられたと考えられるのであり、聖人の長文の書状における封の加え方、或は料紙の折り方の一つの特徴を示していると思われる。

以上、主に二紙及び四紙の書状の折りたたみ方等について検討を加えた。ここで取上げた事例は、本紙に封が加えられているものであった。しかし、聖人の書状には懸紙を伴う場合や、料紙の表裏両面に本文を記してい

る事例も知られるのであり、後者の場合は聖人以外にはあまり知られていない。これらの検討は後日の課題としたい。

## 日蓮聖人の靈山往詣論についての一考察

都 守 基 一

近年、靈山往詣は、日蓮聖人の成仏論や、宗教的安心の問題との関連において重視されている。ここでは特に、聖人が自身の靈山往詣の願望や確信を述べておられる佐渡期の遺文にみられる説示と、前後の文脈の関連等について検討してみたい。

文永九年の『開目抄』、『宮木殿御返事』、および龍口法難の体験を述べられた『種種御振舞御書』には「靈山にまいりて」（六〇五頁）、「期<sub>ス</sub>靈山浄土」（六二〇頁）、「日蓮今夜願切て靈山浄土へまいりて」（九六六頁）等、靈山往詣の願望、確信と共に、「生死を離<sub>ル</sub>時<sub>ニ</sub>は必此重罪をけしはて、出離すべし（略）大難の来は、